

昭和27年5月22日付 谷口直枝子宛吉田茂書簡

すえこ

【釈文】

拝復、民藝館

参観之義、難有

存候、柳氏及山梨

大将の都合を伺、

明廿三日午後三時

頃参度、唯今両氏

の都合尋居候、

当邸花もの満

開ニ有之、又来

月週末毎ニ箱根

コワキ谷三井別邸

借入参候、御来遊

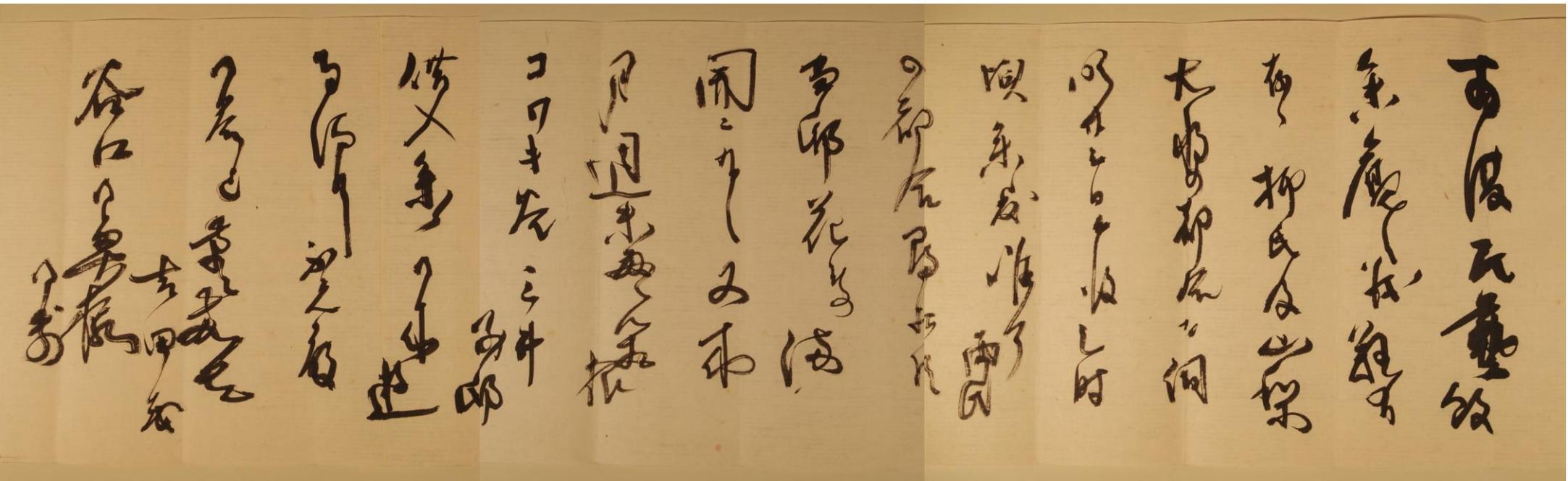
奉侍候、不取敢

御答迄、草々敬具

吉田 茂

谷口御奥様

御前



【書き下し文】

拝復、民藝館

参観の義、有難く

存じ候、柳氏及び山梨

大将の都合を伺い、

明廿三日午後三時

頃参りたく、唯今両氏

の都合尋ね居り候、

当邸花もの満

開に之有り、又来

月週末毎に箱根

こわき谷三井別邸

借入参り候、御来遊

侍り奉り候、取敢えず

御答え迄、草々敬具

吉田茂

谷口御奥様

御前

【現代語訳】

拝復、民藝館参観のこと、

ありがたく存じます。柳

〔宗悦〕氏及び山梨〔勝

之進〕大将の都合を伺い、

明日二十三日の午後三時

頃お伺いしたく、ただい

ま両氏の都合を聞いてお

ります。私の家では花が

満開です。また来月週末

ごとに箱根小涌谷の三井

別邸を借り入れておりま

す。遊びにいらしてくだ

さい。とりあえずお答え

まで。

草々敬具

吉田茂

谷口御奥様

御前

昭和27年5月23日付 谷口直枝子宛吉田茂書簡

【釈文】

拝啓、本日の民藝

館参観も大ニ

わかつたような、

勉強ニなつたような

気か仕候、御礼申上候、

之より大磯ニ帰

へり候、柳様へハ、

あなた様より宜敷

御伝声奉願候、

御礼之印までニ

到来もの持参

被為致候、御笑

納可被下候

匆々不一

五月廿三日夕

吉田 茂

谷口御奥様

御前

市原の民藝
館参観も大ニ
わかつたような、
勉強ニなつたような
気か仕候、御礼申上候、
之より大磯ニ帰
へり候、柳様へハ、
あなた様より宜敷
御伝声奉願候、
御礼之印までニ
到来もの持参
被為致候、御笑
納可被下候
匆々不一
五月廿三日夕
吉田 茂
谷口御奥様
御前

【書き下し文】

拝啓、本日の民藝

館参観も大いに

わかったような、

勉強になったような

気がつかまつ仕り候、御礼申し上げ候、

之これより大磯に帰

へり候、柳様へは、

あなた様より宜よろしく

御伝声願でんせいい奉り候、

御礼の印までに

到来もの持参

致いたさせられ候、御笑

納下くださるべく候、

匆々そうそう不ふ一いつ

五月廿三日夕にじゅう

吉田茂

谷口御奥様

御前おんまえ

【現代語訳】

拝啓、本日の民藝館参

観も大いにわかったよ

うな、勉強になったよ

うな気が致します。お

礼申し上げます。これ

より大磯に帰ります。

柳〔宗悦〕様へは、あ

なた様よりよろしくお

伝え下さいますようお

願い申します。お礼の

印として頂き物を持参

させていただきます。ご笑納くだ

さい。

匆々不ふ一いつ

五月廿三日夕

吉田茂

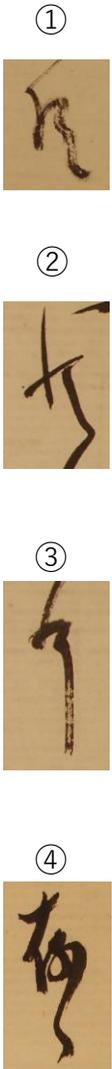
谷口御奥様

御前

【候文について】

吉田茂の書簡は、現代の私たちが使っている文体とは異なり、和文と漢文体が混ざった和漢混合文で、かつ文末に「候」を使用する「候文（そうろうぶん）」で書かれています。これらは、江戸時代の古文書などを読む際によくでてくる文体で、「候」は「です。」「ます。」という意味で、文の末尾に使われます。

「候」は、文中に頻出するため、省略形で書かれることが多く、ほぼ点に近い形となることもあります。吉田の書簡でも、様々なバリエーションで「候」が書かれています。



右の文字は、すべて今回ご紹介している書簡から抽出した「候」です。①から③までは、比較的崩さずに書かれています。④は「存」のあとにほとんど点のような形で「候」が書かれています。どこに「候」が隠れているか、一度吉田の書簡を探してみてください。

点や線の一部として書かれた「候」を読むことは、容易ではありませんが、古文書独特のリズムに慣れていけば、候文も読めるようになります。まずは、文章を音読して、文のリズムをつかむことが習熟への近道です。

【内容解説】

今回ご紹介する書簡2通は、柳宗悦（やなぎ・むねよし、1889～1961）が創設し、館長を務めた日本民藝館に、昭和27年5月、吉田茂と山梨勝之進、柳宗悦が連れ立って来訪した際のものです。吉田茂が書簡を送った谷口直枝子は、柳の実の姉で、書簡からは、谷口夫人が吉田と柳の交流を取り持っていたことがうかがえます。

柳宗悦は、民芸運動を主導した文化人として知られた人物です。現在では、「民芸」「民芸品」など私たちも何気なく使っていますが、この「民芸」という言葉を創作したのが、柳です。吉田が訪れた柳の日本民藝館は、柳が収集した民芸品を展示するための施設で、昭和11年に開館しました。柳の言う「民芸品」とは、「民衆的工芸品」のことで、民衆が使用するようなごくありふれた工芸品のなかに、簡素な美しさが宿っているという柳独自の考えが「民芸」という言葉には込められています。

よく「貴族趣味」だと言われた吉田の民藝館来訪の感想はというと、「大いにわかったよ。うな、勉強になったような気が致します」というもので、本当にわかっているのかどうか、ちよっと曖昧な印象を受けますが、決して美辞麗句を並べないあたりに、吉田の率直さが出ているともいえます。

ちなみに、吉田と一緒に民藝館を訪れた山梨勝之進（やまなし・かつのしん、1877～1967）は海軍中将を務めた人物で、戦後吉田とも交流がありました。

※参考文献

柳宗悦『民藝とは何か』講談社学術文庫、平成18年

（原本は昭和16年、昭和書房より発行）